

が
ツア

異国情緒の長崎は、 ランタンに彩られ...

添乗記

中村 優子

二年ほど前にJALの機関誌で読んだ「長崎ランタンフェスティバル」、ロマンチックな文章に「行くこう」と心に決めていた長崎。お祭りは毎年二月中国の春祭に合わせ開催される長崎に春を告げるお祭りです。海と山に挟まれたエキゾチックな町が柔らかなランタンの灯りに埋め尽くされ、中国とも日本とも違う幻想的な雰囲気包まれます。お祭り大好き美味しいもの大好きなお客様十名との楽しい旅の出発です。

ご存知のように長崎は、長い鎖国の時代に唯一外国に開かれた窓として独特な文化を作り上げてきました。文化の不思議な融合によって出来上がった町は色彩、建物、食文化―他どの都市とも異なる魅力的な町だと思えました。「美味しい」という一言で地の果てまで出かけてしまおうという旅の始まりは博多の「寿司伝」。地酒の「杜ノ蔵」と肴、旅の始まりの食事はとても大切、皆様大満足の声にほっとした初日でした。さて博多の名酒にほろ酔い気分の笹加組は憧れのハウスステンスへ。本日はチューリップの咲く春が一番の見どころなのだそうですが、この季節は園内に美しいライティングが施され、まさに煌めく光の渦！数々の楽しいイベントも催されていますがうろろしているうちに時間は過ぎ、期待の「仮面舞踏会」には参加できず残念でしたが、ホテルヨーロッパのロビーコンサートには参加できず素晴らしいものでした。デイズニールランドのちょっと大人版かな？今度来る時はもっとゆっくりに時間を取って来たいなと思いつつ、翌日は長崎へ。お祭りの町は穏やかな雰囲気観光日和、出島、グラバー園、浦上天主堂。もちろん長崎と言えば「ちゃんぽん」。早速老舗「合山楼」へ。ちゃんぽん・皿うどんみんな食べたいけど残念ながら夜の食事のため皆様小食で我慢！でも唐汁で仕上げられた独特の麺はさすがでした。



長崎市内の中心部に約15,000個にも及ぶランタンが幻想的に街を照らしていました

長崎の宿はこだわりの雑誌「楽」のホテル「セントグラバーズハウス長崎」、ゴージャスではないけれど隅々まで行き届いたお洒落なプチホテル。ロビーにはセレクトされた本が並びワインお酒からコーヒーマまでお好きに召しあがって下さいとのこと、なかなか粋で気持ちの良いホテルでした。夕食は幕末の志士たちが愛した料亭「力」で卓袱料理を堪能、幸せな気分です。淡いランタンの光に埋まる町へとくりだしました。タクシーを飛ばして登った稲佐山からの夜景はまさに世界三大夜景と言われるだけあって素晴らしい一言。もちろん余の更けるまでまったりと呑みつ

五月二十六日、二十七日とお隣の三重県ではG7伊勢志摩サミットが行われました。議長国として日本で8年ぶりの開催と言う事で大きな関心を集めました。隣県の愛知県においても交通規制が数多く行われ、皆様にとっても非常に興味深いサミットになったことでしょう。さて、なぜサミット？笹加とつながらないうい！とお思いの方も多いと思います。

実は：笹加のきものがサミットで大活躍したんです！今回のサミットは伊勢志摩開催でしたが、各国首脳は

有松絞りのきものを世界に発信！

営業部 浦田雅秀

まずはセントレアへ降り立ち、その後伊勢志摩へ向かいます。その際、セントレアでのお出迎えにおきまして、花東贈呈のすべての女性に絞りのお振袖を着用していただきました。本正田絞りの鹿の子絞り、桶絞り、本藍染めなどを笹加でご用意いたしました。皆様もユースでご覧になられたお出迎えのシーン、アメリカのオバマ大統領やイギリスのキャメロン首相、ドイツのメルケル首相も皆、最初に目にした日本らしさが絞りのお振袖だったわけですね。各国首脳の方々の目にはどのように映ったのか、お伺いし

つ喋りつつ長崎の夜は更けてゆきました。翌日は諫早の「鼈甲細工」の工場へ。玳瑁の輸入が制限され、今は希少な伝統工芸になりつつある鼈甲は細かい行程を経て作り上げらえる美しい鼈甲工芸がいつまでも続くようにと心から思いました。昼食は「福田屋」鰻の名店です。長崎・諫早とも歴史の重みと文化の厚みを感じる旅もそろそろ終わり。帰りの新幹線は賑やかな大宴会になりました。旅は道ずれ：ご参加の皆さまのご協力によって楽しい旅をさせて頂きました。有難うございました。

てみたいものです。今回は愛知の伝統と革新を世界へ発信するために、400年間歴史を繋いできた「有松絞り」にお声がかかりました。日本文化の代表として、このような機会をいただけた事はとても光栄に思います。

最近「有松絞り」が色々な場面面で取り上げていただき、また、有松へ訪れる方々も日に日に増えてきております。この度もアウトリーチ国の奥様が有松を訪問して下さる予定になっておりまして、残念ながら、諸事情で来訪はできなくなりましたが...

有松はこの夏に国指定の重伝建地区に選定されます。選定されれば、国内外問わずたくさんの方々有松へ足を運んでいただける機会がますます増える事でしょう。徳川の保護を受け、絞りは有松でしか手に入れることができなかつた江戸時代、わざわざ絞りを求めにくく人々がこの地を訪れたと文献にも残っております。

もう一度、浮世絵に描かれる賑わいを再現できるように、世界中の人々へ、この素晴らしい街並み、400年受け継いできた絞りの技術を発信し続けたいと思います。

只今、「笹加だより」では、皆様からのご意見・ご投稿等をお待ちしております。皆様の日頃からの疑問に思っていることやご相談など、どんな些細なことでも結構です。どうぞお気軽に「ヴォイス」のコーナーまでお寄せください。(担当/中村優子まで)

Voices ヴォイス
—皆様からのご意見・ご希望—
今の特加を今以上の倍加にするために皆様のお声を聞かせて下さい

笹加だより

編集・発行
株式会社 笹加
編集委員会
名古屋市区有松1802番地
TEL.052(623)3338

2016年
夏号

SASAKA
NEW PROJECT

新プロジェクト だより

営業部
竹田 昌弘

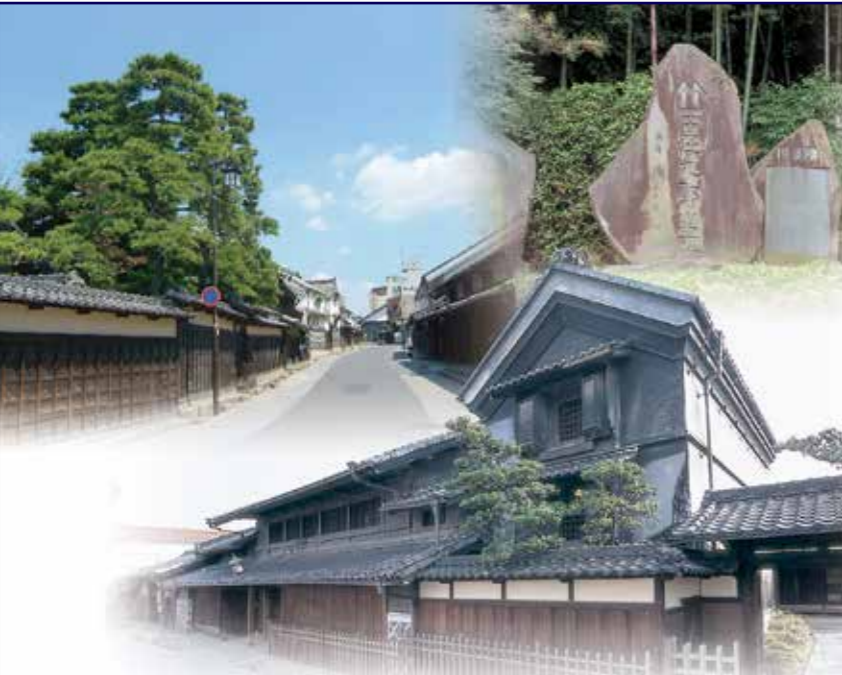
今回5月の絞り展にて発表展示させていただきました。ただでのご覧いただいた方も多くかと思いますが、革を絞つてのバッグがいろいろ出ましました！(今まで試作品ばかりでしたが、やっと販売できる商品ができました)日本のバッグ産地のひとつ、兵庫県豊岡市。奈良の正倉院の倉庫からも柳かごが出てきているほど、絞りと同様、古い歴史があります。

その豊岡のバッグメーカーと、今回コラボレーションという形でバッグが完成。バッグそのものはメーカーオリジナルで、そこに革を絞つた生地を使用しました。2月にはイタリア・ミラノで開催された世界最大のバッグ展示会「ミヘル」にも出展し、高い評価を得ました。これからもコラボレーションやオリジナル商品をどんどん発表していきますので、応援、宜しくお願いいたします！



いよいよ、重要伝統的 建造物群保存地区に選定!?

竹田 嘉兵衛



青空にかかる白雲から太陽が輝き真夏の到来が近いことを知らせています。お元氣にお過ごしですか。昭和44年に当時の朝日新聞記者の石川忠さんの提言を機に地元住民と名大や名工大の先生や学生が集まり、町並保存と町づくりに関する研究が始まりました。昭和48年に伝統的な美しい町並を保存することを目的として「有松町づくりの会」が発足し、その後足助、妻籠や今井町との話し合いの結果「全国町並み保存連盟」が結成されました。日本では第二次大戦後、スクラップアンドビルドという考え方の下で古いものを壊し、新しいものをつくっていくという事が正しいとされてきた世の中で、日本の美しく古い町並を保存して行こうと考えたことは、今では高い評価を得ています。他の保存地区では伝統的な建造物はほとんど消えてしまった中で、有松では江戸から昭和初期に建てられた建物が、半分以上保存されています。その要因は、①町の住民の中で自分たちの歴史を形として残している美しい町並に、誇りと愛着をもっている人が多かったこと。②町並保存を発想した素晴らしいこの町の諸先輩が、町並み文化の重要性を説き、保存に努力した事だと考えられます。

近年になつても、江戸時代の町並を再現する電柱の地中化や、中榎竹田家の外観保存も先輩達の志を受け継ぐ、現代の住民の献身的な努力によって成し遂げました。

幕末の英国外交官アーネスト・サトウが「日本 清潔で豊かな感じがする町」と絶賛した美しい町並とそれを作り出した有松の文化を再現し、江戸の粋を現代に残す有松を作り上げる為に、今回の重要伝統的建造物群に選定されたことを利して、皆で力を合わせて、将来ここに育った子供達が有松を故郷にすることを誇りに思える町づくりをしていきたいものです。

伝統を守るために頑張ってます 羽田野 孝行

最近、テレビや雑誌を見ていると、いろいろな伝統産業がとりあげられているのを目にします。有松絞りのCMやドラマの衣装に使われていたり、職人の取材があったり何かと注目されていることを実感します。しかし、職人の高齢化や人手不足といった問題で、絞り製品が出来にくくなっているのが現状です。絞りが出来るまでにはいくつかの工程があり、全て手仕事で行われます。図案、型彫り、絵刷り、くくり、染色、ほどこき、ゆのしの順で完成し、ひとつでも欠かすことができません。それぞれの工程に専門の職人がいて、長年培ってきた経験を後世に伝えていきます。

先人たちは、伝統を守りながらもその時代に合わせた技術の革新や新しい商品の開発を何度も繰り返して、何度かあったであろう伝統の危機を乗り越えて408年の歴史を築いてきたのだと思います。笹加は、50年後、100年後も有松絞りが存在するための重大な役割を担った会社なのだと思います。



「絞り回廊」。今回も様々な絞りが旧東海道を彩りました

第32回 有松 絞り まつり

竹田 宗弘

今年も恒例の「有松絞りまつり」が6月第一週目の土日の4日、5日に開催されました。おかげ様で絞りまつりも今年で32回目を迎える次第になりました。

この「絞りまつり」は有松と絞りの発展、そして両者の認知度を高めるため始まりました。当時は愛知県での有松と絞りの認知度は少々ございましたが、少し足をのばして他の地域に行くと、有松を知らない人がほとんどで、有松の説明をする場合は「信長が桶狭間で今川義元を破りましたよね。その桶狭間が有松町桶狭間なんです。」というやっとなりご理解して頂けるという感じで、絞りに至っては「絞りってなんですか？おしほりの事ですか？」と。いえ、それは飲食店を出てくるやつです、ハイ。といった状況でした。

それを伝えるべく先人はまつりを始めたのですが、最初は「有松商まつり」という名称でささやかに始まりました。しかしかんせん認知度が低いせいか、なかなか思うように人が集まらなく、当時は先人達も試行錯誤し、いろいろなイベントを行っておりました。その中で私にとって印象のあるイベントが「へビメ

タまつり」なるもので、当時(1986年頃)巷ではへビメタが若者の間で流行っており、有松にへビメタバンド(ほとんどアマチュアの方はかりだったと思う)を呼び、ステージで歌ってもらい、若年層にまつりに来てもらおうという試みでした。有松に民謡ならともかく、なぜへビメタなのかと子供にも疑問を感じました。が、好奇心と怖いもの見たさで会場に行くと、絞り会館の横のステージから「おまえら元気か」というへビメタのお兄さんの絶叫に対し、若人が皆無な状況で地元のおじいさん、おばあさん達が手を振り上げ「おおー」と。小学生ぐらいの子供達もいたのですが、へビメタのお兄さんのいでたちに恐れをなし皆沈黙。それを見たバンドのお兄さんたちも苦笑しており、のどかな有松の町にひたすらへビメタの大音響が響き渡るといふシュールな光景を垣間見た記憶がございます。

そんな紆余曲折もございましたが、32年前に「絞りまつり」と名を変え開催したところ、ここまで規模が大きくなった次第です。

現在では、まつり両日で全国から8万人程度の来町者があり、出展店舗は飲食店合わせて200店舗まで拡大しております。

本年のまつりは去年まで好調だった株価が下落し、さらに九州地方で震災が起こったので、集客に不安があったのですが、当日は例年通り大勢の方が来町し賑やかなおまつりになりました。



▲「有松くん」も子供達に大人気

▶本年のミス絞りと福男も会場で大活躍!

東京店より

笹加文化講演会と展示会 はんなり京の色…京の織

東京店 佐々木祐助

笹加・東京店では、三月二十四日(木)から二十六日(土)までの三日間、各日共、午前の部十時三十分から午後二時二十分まで二回に分けての講演会「西陣織、山口三兄弟の世界を語る」と題し講演会を、笹加・東京店のお店にて開催いたしました。来客数も、曜日により片寄もありましたが、三日間共うまくばらけて頂き、何とか講演会がスタート。講師としてお招きしましたのが、西陣織の巨匠とも云える山口三兄弟の次男、安次郎翁のお孫様にあたる浅田聖治氏にお願いいたします。

今回は「京都が放つ彩り豊かな「色彩」をテーマに、都の織や染めを通して、歴史や文化をご紹介。予定のお客様がお見え頂きたい、初めに山口伊太郎・安次郎翁のビデオを鑑賞、実際に工房にて手機を織る姿を見て頂きます。織りあがりの帯、装束衣装の豪華絢爛な色調使い、どれをとっても見事な出来栄。その作品の美しさと、凄さに「きゃー綺麗、素敵!!」と一同歓喜の声も。



美しい織物に見とれ、浅田さんの話術に聞き惚れた、内容の濃い3日間でした

その後、作品をご覧になりながら、浅田氏の独演会の始まりです。三年前に執り行われました伊勢神宮の式年遷宮の際、御神宝の「帛」白生地を奉納された山口安次郎翁の奉納時のエピソード話などなど。さらには、山口伊太郎作、几帳も特別に出品して頂き、直にご覧頂きご説明していただ

きました。何と巧みな話術、豊富な知識の奥深さにお客様も大満足。時々話が脱線することも。途中にて一度休憩、京都下鴨の有名老舗謹製の葵祭にちなみだこだわりの銘菓で一息。その美味しさに皆様ご満悦の様子、お茶を頂きながら自由談話、様々な分野に精通しておられる浅田氏に、質問などが次から次へと飛び交っておりました。

笹加大阪です 団扇の老舗 京都岡崎「小丸屋住井」を訪ねて

笹加大阪 京都ツアー(浅田企画) 大阪店 岸野芳一

四月末の二日間、笹加のお客様をお誘いして京都へ遊びに行つて参りました。京都では最近特に外国からのお客様が古都の風情を楽しまれる姿をよく見かけます。GWが始まったこともあり、当日の京都は何処も多くの人が賑わっていました。



京文化のひとつ、京うちわや京丸うちわ、京扇子などに目を奪われます

東福寺方丈庭園の作庭を手掛けた重森美玲の庭園美術館に始まり、祇園白川の創作会席「たむら」でのお食事、1,000年以上の歴史を誇る深草団扇の老舗「小丸屋住井」を見学し、円山公園内の甘味処「茶菓丸山」で締めくくり。今回、特筆すべきは深草団扇の「小丸屋住井」。長年に亘って継承してこられた伝統的な制作技術の品質もさることながら、先行投資としての新社屋建築が素晴らしい。シヨールームを兼ねた近代的なインテリアを設けた

廊「ハンカチやテーブルセンターを絞る絞り教室、歴史のある有松の町並みをめぐる町並みツアー、マーチングパレード、市の文化財にも指定されている有松の3台の山車で行われるからくり人形の実演とお囃子の演奏、伝統工芸士の絞り職人さん達が一同に揃った絞り実演コーナー、本年初めてのイベント「花魁変身体験」など盛りだくさんの内容でもまつりが盛り上がりました。また最近若い方も政府のクールジャパン政策のせいも、伝統文化を見直す動きがあり、絞りのクリエイターも次々若手が入ってきており、来町者も若年層が増えてきたことは、昔のことを思うとうれしい限りでございます。

有松絞りを世界へ

竹田 昌弘

為三郎記念館 特別企画 竹田 耕三 追悼展

6月11日より約2か月間、千種区にあります古川美術館分館・為三郎記念館にて「竹田耕三追悼展」を開催させていただきますこととなりました。父が亡くなって2年。またこうして皆さんにご覧いただけることを喜んでおります。今回は生前交流がありました、ジュディオングさんの版画や、阿部 肥さんの市松人形も展示いたします。展示会期間中、様々なイベントも催しますので是非足をお運びいただければと思います。

会期	平成28年 6月11日(土)～8月7日(日) 前期●6月11日(土)～7月10日(日) 後期●7月12日(火)～8月7日(日)
開館時間	午前10時～午後5時(月曜休館、但し7/18は開館、翌19日休館)
会場	古川美術館 分館 為三郎記念館



見事な和紙のオブジェは匠巻

変化に寄り添い、人々の気持ちに寄り添いながら価値観を進化させていくことが大事なのだろうと感じました。難しい話より、やはり「百聞は一見に如かず」。是非一度、小丸屋さんを訪ねて京都へ足を運んでみて下さい。美しく、精緻な作りの団扇の数々。現在知られている「扇ぐ」という機能だけではない、踊りや舞いに使われる小道具としての存在感。祭祀では神聖な道具として穢れや災厄を祓う力があるとされ、団扇は翳して使うものでした。そんな深い歴史に培われた団扇・扇子の真の文化を感じられるのも、なかなか乙なものではないでしょうか。そしてもう一つのお勧めは、円山公園の敷地内にある茶菓「円山」の風情。元高級料亭だった古民家風の建物は、飲食店の看板などに有り勝ちな外観の自己主張はほとんどなく、季節がら藤の花とツツジの花に彩られ、また木賊に囲まれてひっそりとお客が立ち寄るのを待っている様相でした。頂いたのは「福みつ豆」という四種類の甘納豆と寒天で、優しい甘さと上質な食べ心地を味わうことができました。



総本山 知恩院にも訪ねました